

敦煌写本

高田時雄

二〇世紀の初頭には東洋学・中国学にとって次々と大きな発見が行われたが、なかでも敦煌写本は資料の豊富さと多彩さにおいて断然他を圧するものがある。発見以来百年、二〇世紀もまさに終わろうとする現在でも、まだ汲み尽くすことのない情報源として多くの研究者の注目するところとなっている。

敦煌写本の存在が広く学界に知られたのは、一九〇九年の夏、フランスの学者ポール・ペリオが敦煌で獲得した写本の一部を、北京の学者たちに見せたことにはじまる。ペリオはその前年の一九〇八年三月に敦煌で王道士から大量の写本を入手していたが、いったんハノイに帰った後、この年あらためて北京にやって来ていたのである。ペリオのさらに一年前にはイギリスのスタインがやはり写本を持ち去っていたことが分かったのも、おそらくその時である。そんなわけで中国の学界では非常な驚愕とともに危機感をつのらせた。そこで急ぎ学部（文部省にあたる）を通じて、敦煌に残った写本をすべて北京に移送させることとした。こういった情報はいち早く日本にも伝わり、内藤湖南や狩野直喜をはじめとする日本の学者たちによる敦煌学の建設が始まることになる。

写本を獲得したのはスタインやペリオだけではない。やや後れて日本の大谷隊やロシアのオルデンブルグなどが敦煌で写本を入手しているのはよく知られた事実で、その結果、敦煌写本は多くの国に分散所蔵されることになってしまった。これはもちろん残念なことといえようが、しかし敦煌写本の研究が世界的なひろがりをもって展開され、一個の国際的な学問領域を形成する機縁にもなっていることもまた否定しがたい側面である。

さて今年二〇〇〇年は、敦煌蔵経洞発見百周年ということで、中国をはじめ世界各地で記念学会が開催されたが、その百周年の起点にあたるのが、上記の王道士すなわち王円籙が敦煌莫高窟のある一窟から大量の写本群を発見した日である。王円籙は湖北省麻城県の人で、飢饉のために流浪し、やがて酒泉で受戒、そのころは莫高窟に落ち着き、住持として窟寺の修復や清掃にあたっていた（図版一）。彼が、偶然のきっかけから塗り込められた壁によって隠された小窟の存在を知り、その壁を打ち破って蔵経洞を発見したのは、光緒二十六年五月二十六日、すなわち西暦では一九〇〇年六月二十二日のことであった。蔵経洞は今日の敦煌研究院による窟番号では十七窟、本来十六窟の入室に入る通路の右側（北側）に穿たれていたものである（図版二）。ふつう敦煌写本という場合、この十七窟から発見された写本を指している。しかし実際には別の元朝時期の窟（四六四窟）から出た写本も存在するし、一九四四年になって莫高窟の中寺裏庭にあった土地廟を取り壊したときに塑像のなかから現れた写本もある。広い意味では、これらも敦煌写本に含まれることになるが、厳密には十七窟発見のものだけを呼ぶことにした方が、いろいろな意味で誤解がない。

その十七窟に置かれてあった敦煌写本は、ペリオ以来、十一世紀の初頭、西夏の侵攻から経巻を守るために封蔵されたものだと、一般に考えられてきた。年代の最も新しい写本でも十一世紀のごく初めのものまでしかない、というのが大きな理由であった。現在ではイスラム勢力の東漸に備えたという説をはじめ、さまざまな異説が提出されているが、何らかの難を避けて保存したのではなく、不要になったものを廃棄したものであるという説も有力になりつつある。さらに莫高窟には十七窟と同様な隠された蔵経洞がまだいくつか存在するはずだという意見もある。

ところで十七窟から出たものは写本ばかりではなく、有名な咸通九年(八六八)の紀年を有する刻本『金剛經』をはじめ、少数ながら木版印刷されたものも存在するので、すべてを写本という言い方で括ってしまうのには、実は問題がある。しかし圧倒的大部分が写本だから、呼称上の矛盾にはしばらく目をつむってもらうことにしよう。敦煌文書という表現ではどうかという意見もありえようが、文書といういい方で仏教經典や諸種のテキストを包括するのにははじめから無理がある。また時に敦煌遺書といういいかたがされる場合もあり、決して悪い表現ではないが、いかんせん現代日本語としてはやや馴染まないきらいがある(図版三)

当の敦煌写本は、数え方にもよるが、あわせて数万点に及び、ロンドン、パリ、北京、ペテルブルグをはじめとして、各国の図書館に所蔵されている。わが国にも民間の所蔵を中心に相当な点数が存在するが、後世さまざまなルートを通じて獲得されたそれら写本には、残念ながら偽物がかなりな割合にのぼるものと考えられている。

敦煌写本は漢文で書かれたものが主で、点数も最も多いのは当然であるが、次いで非常に多くのチベット語写本があり、コータン語、ソグド語、ウイグル語、サンスクリット語の写本もある。珍しいところではヘブライ語写本さえ含まれている。これらの文献が蔵経洞から発見されるたは、敦煌が東西交通の要衝であったこともさることながら、敦煌のたどった歴史と密接な関係がある。チベット写本の存在は、八世紀の七〇年代から八四八年にかけて、敦煌がチベット(吐蕃)の占領下にあったことと不可分だし、コータン写本は十世紀の敦煌国とタリム盆地南縁に位置するコータン国とが最友好国であった事実を抜きにしては考えられない。これらの漢文以外の写本は、言語資料として極めて重要なものであるのみならず、歴史資料としても貴重なものが多い(図版四)

そもそも現存するチベット語の文献は、書写チベット語として完成された後のものが大多数であり、七・八世紀の吐蕃王朝時代の文献としては、碑文を別にすれば、敦煌写本において他に見いだしがたい。特に吐蕃の年代記や王統表、軍団の編成にかかわる公文書など、吐蕃の歴史を解明する上でかけがえのない材料を提供してくれている。仏教文献のうちにも、中国の影響による禅仏教の文献が見いだされるなど、仏教史の上でも注目すべき材料に事欠かない。またチベット語で書かれていても、実際にはその担い手が、吐蕃支配期を通じてチベット語文に通じた敦煌の漢人である、というような場合もあることが分かってきており、当時の敦煌の言語社会の様相に新たな光を投げかけるものとなっている。コータン語写本は、コータンを中心とする周辺の遺跡から発見される写本の多くが仏教經典であるのと比較して、蔵経洞のコータン語写本には当時の外交とそれにかかわる俗文書を多数含み、十世紀のシルクロードをめぐる国際関係を解明する第一級の資料となっている。しかしこれらの写本は、表記に大きな揺れのある、いわゆる新コータン語で書かれており、かつ仏典のような解読上の比較材料を欠くために、きわめて難解である。そのため本格的な解読とその利用はまだ緒に就いたばかりであるが、将来に期待すべき部分はすこぶる多い。

さてもっとも重要にして、かつこれまで多くの研究が費やされてきた漢文写本の概観に移ろう。

漢文写本の九〇パーセント以上は、仏教經典いわゆるお経である。これらの經典は、三五九年の年号を有する「譬喩經」(書道博物館所蔵)を最古の写本として、十世紀末に至るまでの龐大な量の集積である。これらは現存する歴代の大蔵經を校訂する上で有用であるとともに、往々附される巻末題記によって各時代の仏教信仰のありようを窺い知ることができる貴重な資料でもある。歴代の大蔵經に収められないいわゆる蔵外經典は、さらに重要な意味を持っている。日本では早く一九三二年に『大正大蔵經』「古逸部」が出版され、この種の蔵外仏教文献蒐集の努力が行われはじめたが、最近中国でも『蔵外仏教文献』の編刊が精力的に進められて、敦煌写本から多く取材している。隋唐の中国で勢力をもった異端仏教「三階教」の実態解明は、わが国の矢吹慶輝によって非常に早い時期になされたが、これなどは敦煌写本という資料がなければとうていなし得なかった業績である。さらにインド語からの翻訳ではなく、中国思想の強い影響下に中国で撰述されたいわゆる

疑偽經典も、敦煌写本中に多く含まれ、日本に伝存する資料などとともに、中国仏教史の重要な資料として熱心に研究されている。

唐室が老子と同姓の李姓であったために、唐代、道教は手厚い保護を受けた。敦煌写本中の道教經典は用紙といい筆跡といい非常に立派な写本であるのが特徴的である。また仏典同様、敦煌写本中の道教經典には、古逸の文献が数多く含まれ、その整理と目録編纂が熱心に行われている。仏教はもともと老子が胡人に化けて始めた教えであると説き、道教の仏教に対する優位を主張する論拠となった『老子化胡経』は歴史上あまりにも有名な書物であるが、ながく失われていた。その断簡がペリオによって敦煌写本中に発見されたことは草創期敦煌学の大きなニュースの一つであった。

仏教・道教以外の宗教典籍は比較的少数であるが、その重要性は決して劣るものではない。景教すなわちネストリウス派のキリスト教文献が七点、摩尼教文献が三種四点知られており、前者はわが国の羽田亨、後者はフランスのシャヴァンヌ・ペリオによって早くから研究され、非常な注目をあびたが、唐代中国における外来宗教の実相を明らかにする資料として今日でもしばしば利用されている。ただ景教文献七点のうち日本所在の六点に関して、その素性に問題のあることが指摘されているのは残念なことである。

宗教文献以外にも、文学、言語、音楽、科学技術、暦算、占ト、医学、薬学、法律、経済、歴史、地理から、日常生活にかかわる手紙や契約書、さらには回覧板や子供の習字にいたるまで、まさにありとあらゆる分野にわたる文献が備わっていて、限られた紙数でこれらをいちいち細かく紹介することはとてもできない。

初期の敦煌学では、一般的に古逸書の探求という傾向が強く、古い書目にあって失われたもの、あるいは書目に見えないもの、さらに現存する書物でも古い姿をとどめるテキストに注目が集まった。なかでも六〇一年撰述の陸法言『切韻』およびその唐代増注本の断簡が多数発見されたことは、音韻史研究の一転機となる資料を提供したものである。敦煌写本発見以前には、一〇〇八年の『広韻』が最も古い切韻系韻書として用いられていた。音韻資料としては韻書以外に、韻図の原型ともいべき等韻のテキストも見つかっている。また、いわゆる『隷古定尚書』は唐代天宝年間に尚書テキストの文字が楷書に改められる以前のおもかげを留めるものとして珍重される。さらにペリオが『慧琳音義』によって同定した『慧超往五天竺国伝』は、玄奘『大唐西域記』から約八〇年後のインド・西域状勢を知る上で貴重な歴史文献である。慧超は新羅の僧で、海路インドにわたり、中央アジアを経て開元一五年安西(龜茲)に帰着している。一九一〇年刊の藤田豊八『慧超往五天竺国伝箋釈』はその最初の本格的な研究として名高いが、その後今日まで数多くの研究がなされている。

琵琶譜の写本が三点存在する。これは歌辞の伴奏に用いる四絃琵琶のための楽譜であるが、特殊な記号を用いて書いてあるために、研究者の頭を悩ませてきたものである。これは一九五〇年代に、林謙三によってはじめて解読がなされた。今日では、中国でもそれを基礎としてさらに研究が進められ、復元された演奏が実際に行われるようになっている。またそのメロディーに載せる歌辞・曲子の写本も数多く残されており、王重民『敦煌曲子詞集』以来、中国俗文学史の重要資料として多くの集成が作られている。

俗文学資料としては、変文の存在を無視し得ない。唱(うた)と説(かたり)を混用する独特なスタイルの変文は、後世の諸宮調や宝卷などの系譜につながる重要な文学史的価値をもっている。変文はまた変相図を示しながら、紙芝居のように語られたものと考えられており、民間文学の実際のパフォーマンスを考える上でも貴重な材料である。主要な変文は一九五七年に校録本『敦煌変文集』として出版され広く行われたが、それを補うものとして八〇年代に潘重規『敦煌変文集新書』や周紹良他『敦煌変文集補編』などが相次いで出た。また項楚『敦煌変文選注』や黄征・張湧泉『敦煌変文校注』など、綿密な訓詁学的研究も出現している。敦煌写本の文学文献ではもっとも

盛んな分野といえよう。また白話詩として有名な『王梵志詩集』も敦煌写本によって知られたもので、これも変文同様、早い時期から注目され、フランスのドミエヴィルの遺著『王梵志詩』をはじめ研究も多い。

律・令など唐代の法典や、告身（任命書）、過所（通行証）などの文書、さらに戸籍や差科簿などの帳簿類、さらに契約文書や公私の書簡などは、制度や社会の実態を知る上でもっとも基本的な資料である。この方面は伝統的に日本が強い分野で、多くの重要な貢献がなされている。これら文書の資料集成として、日本では英文の『敦煌吐魯番社会経済資料集』が現在第四巻まで出ており、中国でも『敦煌社会経済文献真蹟積録』五冊が一九八二年から九〇年にかけて出版された。

敦煌では仏教が社会の隅々にまで大きな影響をもっていた。したがって寺院や仏教教団にかかわるテキストは非常に多く、それらを用いた教団の組織や寺院の経済活動に関する実証的研究が行われ、大きな成果を挙げてきた。この種の研究も伝来の文献のみでは到底不可能な領域で、敦煌写本ならではの業績といえる。

敦煌写本全体のうちで、もっとも新しい時期に属する九・十世紀の文献がもっとも豊富ことは当然である。ちょうどその時代は中原と敦煌との間の交通が円滑を欠き、敦煌を支配する帰義軍政権が実質的には半独立国の状態であった。そのため中原で編述された歴史には帰義軍節度使の系譜や事績に関する詳しい事柄が記録されていない。それを埋めるための帰義軍時代史の研究が非常に盛んに行われるようになってきている。

他にも敦煌写本の研究に関して言及すべき事柄は多いが、紙数が尽きた。敦煌写本に関する、八〇年代の日本の研究を総括するといつてよい『講座敦煌』全九巻などを参照されたい。最近の中国における敦煌学の伸展には目を見張るものがあるが、多くの出版物のなかで『敦煌学大辞典』にはもっとも新しい情報が盛られている。